

ダ型文と前提の型

——ホドダ文を例として——

奥津 敬一郎

1. はじめに
2. Sホドダ——前提の4つの型——
 - 2.1 第1の型——名詞化型——
 - 2.2 第2の型——接続文型——
 - 2.3 第3の型——独立文型——
 - 2.4 第4の型——後方文脈型——
3. NP ホドダ Neg
4. 比例の「ホド」

1. はじめに

程度の形式副詞およびそのひとつである「ホド」については、すでに奥津(1975)、奥津(1980)で論じた。そこではほぼ次のようなことを述べた。

程度の形式副詞としての「ホド」は、1) 程度そのもの、[+degree]を意味するものと、2) 比例、[+proportion]を意味するもの——これはもはや「程度」の形式副詞とは言えないかも知れない——の2種類がある。前者は、それがとる補文によって、更に1) 非常の程度を表わす副詞句となる場合、2) 通常の程度を表わす副詞句となる場合——この場合は「ホド」は必ず「ニ」をとって「ホドニ」となる——、3) 同程度を表わす副詞句となる場合、の3つがある。同程度の「ホド」の場合は、補文の述語と主文の述語とが同一であり、補文の方の述語が消去されて、主文のちがう名詞句だけが「ホド」の前に残り、また主文の述語は否定辞をとる。次にそれぞれの例を示しておく。

(1) 非常の程度の「ホド」

コン棒ニ 血ガイッパイ ツク ホド ナグラレタ

(2) 通常の程度の「ホド」

病気ニ ナラナイ ホドニ 勉強シテクダサイ

(3) 同程度の「ホド」

夫ガ 子供ヲ 愛スル ホド 妻ハ 子供ヲ 愛シテイナカッタ→

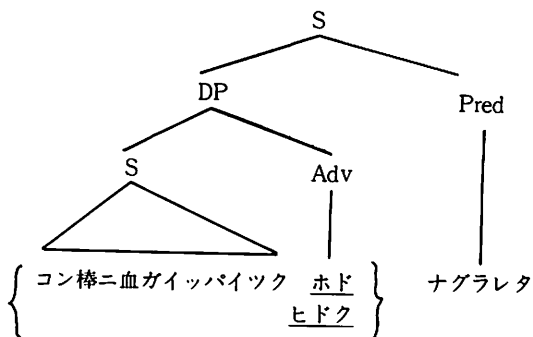
夫 ホド 妻ハ 子供ヲ 愛シテイナカッタ

(4) 比例の「ホド」

争エバ 争ウ ホド 二人ノ孤独ハ 深マツタ

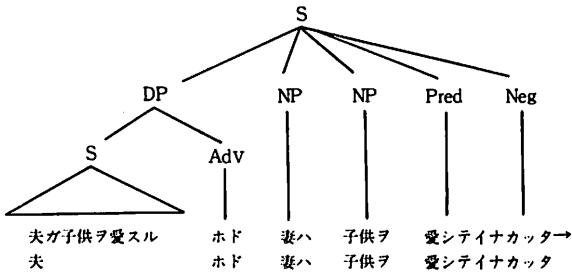
いずれにせよ「ホド」は副詞(Adv)であるが、「非常ニ」「ヤヤ」「チョット」などの自立副詞とちがって、補文を要求する。「ホド」はこの補文と共に副詞句(DP)をつくり、主文の述語(Pred)を修飾して、その述語が表わす事柄の程度を示す。この点では程度の自立副詞とちがいはない。次に非常の程度の「ホド」と同程度の「ホド」を例にとって、その構造を樹形図で示しておく。

(5)



(5)でみるように、「コン棒ニ血ガイッパイ ツクホド」という副詞句は、「ヒドク」という非常の程度を示す自立副詞と同じような文法機能と意味を持っているわけである。

(6)



(6)は、「妻ガ夫ト同程度ニ子供ヲ愛シテイル」ことの否定文である。

奥津(1980)は、主に以上のような構造について述べたが、このほかに「ホド」が「ダ」の前に来て主文となるものがあり——ホドダ文と呼んでおく——、これについてはあまりくわしく触れられなかった。

(7) 性描写ガ 露骨ニ ナッタ コトハ 驚クホドダ

(7)がその例であるが、小論ではこのホドダ文について述べてみたい。実はこれは、「ホド」だけの問題というより、一般的には、「ボクハウナギダ」のようなダ型文と、それが成立する条件の問題であって、かなり広い射程を持つものである。それへの手がかりとしてホドダ文を観察してみようというわけである。

(「通常の程度」の「ホド」はあまり使われないようなので、小論では扱わないことにする。)

2. Sホドダ——前提の4つの型

2.1 第1の型——名詞化型

まず非常の程度の「ホド」、つまり Sホドダという形をとりあげる。

(8) 驚クホドダ

(8)の文の聞き手——もちろん読み手も——は、これだけでは話し手の意図を理解したとは感じないだろう。「一体何が驚クホドナノカ」と疑問をいづくにちがいない。

(9) 太郎ハ 驚クホドダ

これで「何が(誰が)驚クホドカ」は分ったが、まだ十分ではない。「太郎ガ驚クホドドウナノカ」と聞きかえすだろう。

(10) 太郎ハ 驚クホド 賢イ

(10)に至って聞き手は満足する。このほか、更にいろいろな情報がつけ加えられようが、それはなくてもよい。つまり程度の副詞句がある場合には、少なくとも「何がソレホドドウデアルカ」という、主語とそれについての述語とが必要である。つまり、

(11) NPガ Sホド Pred

という形が、「ホド」を含む構文の基本的なものと考えられる。小論ではこれを基底文としておく。

ところが、(8)や(9)のような「Sホドダ」という形は、(10)とちがって、それ自身が主文の述語となっているから、「ドウデアルカ」を主文の述語として示すことができない。(7)の例に戻ると、これも主文の述語は「驚クホドダ」である。そこで「性描写ガ露骨ニナッタ」という主語・述語のととのった文を「コト」によって名詞化し「ハ」をつけて主題化して、完全な文となっているのである。

(12) a. 性描写ガ 驚クホド 露骨ニ ナッタ
b. 性描写ガ 露骨ニ ナッタコトハ 驚クホドダ (7)

(12)のbは(7)のホドダ文を再度示したもののだが、これに対応する基底文はaであろう。aとbの事柄の意味は同じである。つまり「性描写ガ露骨ニナッタ」こと、そしてその程度が「驚クホド」であること、を表わすという点では両者にちがいはない。たゞちがうところは、aは、どの成分にも特に強調をおこななければ、通常の叙述文であり、bでは、「何がドウデアルカ」が「コト」によって名詞化されて主題となり、「驚クホド」がとりたてられてこの文の焦点となっている、という点である。この焦点に対して、「何がドウデアルカ」を示す成分を前提と名づけると、この前提は、bでは名詞化された主題として現われている。つまりホドダ文は、Sホドダ だけでは十分でなく、前提によってその意味が完全に伝えられる。逆に言えば、前提に含まれる情報がすでに与えられていれば、Sホド という程度の副詞句は、基底文の形をとる必要がなく、「ダ」をとって、それが焦点であることを明示するのである。

(12)のbはいわゆる分裂文に似ている。分裂文は、文の中の焦点を「ダ」の前におき、その他の部分を「ノ」によって名詞化し、主題とする。bもこの分裂文の形がとれる。

(13) 性描写ガ 露骨ニ ナッタノハ 驚クホドダ

更に、また次のような名詞化でも、(12)の a, b や(13)と事柄の意味を同じくする。

(14) 性描写ノ露骨サハ 驚クホドデア

この文の主題は、もう文の形をとらず、「ノ」も「コト」も使わず、いわゆる接尾辞の「サ」による形態論的な名詞化によって示されている。しかしそれは「太郎」や「太郎ノ本」のような単なる名詞句ではなく、「何ガドウデアるか」という文の圧縮されたものとして、前提の役割をりっぱに果している。

更に次のような名詞化の形もある。

(15) 戦時ニオイテノ情報宣伝、報道ガ イカニ 困難ナモノデアるかハ、タトエバ 第一次大戦ノ終ッテ後ニルーデンドルフ将軍ヲシテ、「ドイツハ兵力戦デハ 勝利ヲ 占メタガ、敵国民トノ精神ニ対スル戦デハ 敗北シタ」ト 述懐サセタホドダ

かなり長い文ではあるが、前提となる主題は「戦時ニオイテノ情報宣伝、報道ガイカニ困難デアるか」という疑問文の形をとって名詞化されている。(15)の文は長すぎるから簡略化して、対応する基底文および、すでに述べた他の名詞化の形と比べてみよう。

- (16) a. 戦時ノ情報宣伝ハ 驚クホド 困難デア
- b. 戦時ノ情報宣伝ガ イカニ 困難デアるかハ驚クホドダ
- c. 戦時ノ情報宣伝ガ 困難ナコトハ 驚クホドダ
- d. 戦時ノ情報宣伝ノ 困難サハ 驚クホドダ

以上のように、名詞化にはいくつかの形があるが、これらをまとめて名詞化型とし、あらまし次のように形式化しておく。

(17) [S₁]_{NP}ハ S₂ホドダ

つまり基底文では主文であった S₁ が名詞化されて「ハ」をとり、「S₂ホド」という副詞句が、「ダ」の前におかれて主文の述語となっている。この名詞化は、変形によって派生されるのか、また(17)全体が、基底文から変形によって派生されるのか、というような問題は小論では触れない。

2.2 第2の型——接続文型

ところが、Sホドダ文は、必ずしも名詞化型に限ら

ない。前提となる文が、連用形またはいわゆる接続助詞の「テ」による中止形の型もある。この第2の型を接続文型と呼んでおく。

(18) 一旗組ノ野心家トカ、カケ落者ガ 殺到シ、カケ落者ノ落チツキ場ト 云ワレタホドデア

この文は連用中止形の「殺到シ」の形をとっているが次のような基底文に対応する。

(19) カケ落者ノ落チツキ場ト 云ワレタホド 一旗組ノ野心家トカ、カケ落者ガ 殺到シタ

(18)は、次のように「ホドデア」がなくても、意味上大きなちがいはない。

(20) 一旗組ノ野心家トカ、カケ落者ガ 殺到シ、カケ落者ノ落チツキ場ト 云ワレタ

(18)(19)(20)の文は、要するに2つの事柄を表わす文が、順接的前後関係、または原因と結果の関係で結びついている。たゞ(18)(19)のような「ホド」をとる文は、後件または結果を表わす文を、同時に程度としても表現している点がちがう。ホド構文のすべてが、順接的前後関係や原因・結果の関係を含むわけではないし、逆もまた必ずしも真ではないが、ホド構文には、この種のものもかなりある。

連用中止形ばかりでなく、次は、「テ」による順接接続形である。

(21) モウ 青木弥次郎モ 八方塞ガリテ、逃ゲ出ル隙モ ネエ ホドダ

(21)は次のような基底文に対応する。

(22) モウ 青木弥次郎モ 逃ゲ出ル隙モネエ ホド 八方塞ガリダ

この場合、2文の関係は前後関係や原因・結果関係というより、同時関係という方がいいかも知れないが、いずれにせよ、(21)から「ホドダ」をとり去っても、意味上大差は生じない。

ともあれ、(18)および(21)に見るように、「Sホドダ」の前提となる情報は、名詞化でなく、順接文の形で提示されている。この順接文は「ハ」をとっていないし、主題とは言えないのだろうが、従って「Sホドダ」が常に主題を要求するとは言えなくなるが、前提を常に何らかの形で必要とすることは明らかであろう。

さて、以上の例では順接文が使われていたが、「Sホドデアナイ」のように否定辞がつくと、前提は逆接の

接続文を要求する。

- (23) a. ボクハ 疲レテ 死ヌホドダ
 b. *ボクハ 疲レテ 死ヌホドデハナイ
 c. ボクハ 疲レタガ/ケレド 死ヌホドデハナイ

aは肯定文だから順接でいいが、bは否定文になっているので、順接文ではだめである。そこでcのように「ガ」や「ケレド」による逆接文にすればよくなる。逆に肯定文の場合、前提を逆接文にすると、次のように非文となる。

(24) *ボクハ 疲レタガ/ケレド 死ヌホドダ

(23)cに対応する基底文は次のようになる。

(25) ボクハ 死ヌホドハ 疲レナカッタ

これは、次の章で述べる NP ホドダ Neg の型と同じで、(25)の否定辞は「疲レル」についているが、別に「疲レナカッタ」と言っているわけではない。「疲レタコトハ疲レタガ、ソノ程度ガ死ヌホドデハナカッタ」と言っているのである。とにかくこの否定辞の故に、前提は逆接の形をとるのである。

ついでのことには、名詞化型の場合、否定文ならどうなるのだろうか。

- (26) a. ボクノ疲レハ 死ヌホドダ
 b. ボクノ疲レハ 死ヌホドデハナイ

(26)をみると、肯定文でも否定文でも、名詞句の形は同じである。つまり名詞句というのは、順接・逆接について中立であるわけで、それが文の形となると、順接か逆接かの選択を迫られるのは、おもしろい現象である。

以上を要するに、Sホドダ文は、その前提となるものを、順接・逆接いずれにせよ、接続文の形でも提示できるわけで、Muraki (1974)も英語について、並列接続文が前提となると述べているが、これを次のように形式化しておく。

(27) S₁ Conj S₂ホドダ

ところで、名詞化型と接続文型とは、どちらでも無条件に使えるわけではない。(18)(21)を名詞化型にすると、どうも不自然な文になる。

- (28) a. ?一旗組ノ野心家トカ、カケ落者ガ殺到シタノ/コトハ カケ落者ノ落チツキ場ト云ワレ

タ ホドデシタ

- b. ?モウ背木弥次郎モ 八方塞ガリデアルノ/コトハ 逃ゲ出ル隙モ ネエホドダ

逆に(7)のような名詞化型は、接続文型にすることもできる。

- (29) a. 性描写ガ 露骨ニ ナッタコトハ 驚クホドダ
 b. 性描写ガ 露骨ニ ナリ/ナッテ 驚クホドダ

このような名詞化型と接続文型の互換性についての追究も興味ある課題となろう。

2.3 第3の型——独立文型

第3の型は、次のように、前提となる文が「Sホドダ」から独立して先行するものである。

(#は文の境界を示すものとする。)

- (30) ソノアトモスフエアハ スバラシイ # 妻ハ 紫雲タナビク ベット・ルームト 形容シタホドデア

(30)に対応する基底文は(31)のようになる。

- (31) 妻ガ 紫雲 タナビク ベット・ルームト 形容シタホド ソノアトモスフエアハ スバラシイ

順接文と(30)のような独立文とのちがいはほんのわずかだから、(30)を次のように順接接続文型にしても実質的な意味にちがいはない。

- (32) ソノアトモスフエアハ スバラシクテ/スバラシクテ 妻ハ 紫雲 タナビク ベット・ルームト 形容シタホドデア

(30)はそれぞれ独立した2つの文から成るから、これは通常の文法が対象する文の構造とはちがって、いわゆる談話(discourse)の構造をとる。にもかかわらず、(30)と(32)とを比べると、形の上で#と順接接続辞とを入れかえただけで、意味の上では全く同じと言ってよい。文の文法と談話の文法とは、この点で連続している。両者の関係を考える上で興味ある現象と言える。

この独立文型に似ているが、次の文は問題である。

- (33) 冗談言ウナ、ト檜山君ハ 肚ノ中デ 怒鳴ッタ # アタリニ 人ガ イナカッタラ、若杉ニ 飛ビカカッテ、首根ツ子ヲ 押エツケテ 締メ殺シテヤリタイト 思ッタ ホドダ

(33)の文は、これまでやって来たように先行する独立文を「ホド」のあとに移動させて基底文としても、どうも不自然な感じがする。長いから簡略化して示す。

(34) *檜山君ハ若杉ヲ 締メ殺シテヤリタイト 思ッタ
ホド 冗談言ウナト 肚ノ中デ 怒鳴ッタ

つまり(33)の先行独立文は、「Sホドダ」の前提としてはどこか不十分なところがある。また名詞化型、接続文型のいずれにしても、この独立文をそのまま使うことはできない。

(35) a. *冗談言ウナト 肚ノ中デ 怒鳴ッタノ / コト
トハ若杉ヲ 締メ殺シテヤリタイト 思ッタ
ホドダ
b. *冗談言ウナト 肚ノ中デ 怒鳴リノ怒鳴ッ
テ若杉ヲ 締メ殺シテヤリタイト 思ッタホ
ドダ

つまりこれは、「怒鳴ル」という述語が、程度副詞と共に起し得ないことによると思われる。にもかかわらず、(33)のような独立文ならば、前提として機能し得るのは、「Sホドダ」との関係が、名詞化型、接続文型ほど緊密でなく、この文全体が「檜山君ガ怒ッタ」のような程度副詞と共に起し得る文を含意するからであろう。そこで次のように「怒ル」を使えば基底文は文法的となる。但し、名詞化型、接続文型は依然として問題が残るが、これはまた別の理由によるものであろう。

(36) a. 若杉ヲ 締メ殺シテヤリタイト 思ッタホ
ド 檜山君ハ怒ッタ
b. 檜山君ノ怒リハ 若杉ヲ 締メ殺シテヤリ
タイト 思ッタホドダ
c. *檜山君ガ 怒ッタノ / コトハ 若杉ヲ 締
メ殺シテヤリタイト 思ッタホドダ
d. ?檜山君ハ 怒リノ怒ッテ 若杉ヲ 締メ殺
シテヤリタイト 思ッタホドダ

とにかく、以上のようにして、独立文であれば、「何ガドウデアルカ」という前提の内容を直接に表わす文でなくても、それを間接的に示すものであればいいことになる。この点では談話構造と文構造とが微妙に異なっているわけである。

以上を第3の独立文型とし、次のように形式化しておく。

(37) S₁ # S₂ ホドダ

さて、もうひとつ、次の例は、以上の3つの型のど

れにも属していないようにみえる。

(38) ワタクシハ マコトニ 深イ感激ニ 壇上デ
涙ヲ オサエカネル ホドデシタ

これに対応する基底文は次のようなものであろう。

(39) ワタクシハ 壇上デ 涙ヲ オサエカネルホド
マコトニ 深ク 感激シマシタ

(39)の主文の述語が、(38)では「マコトニ深イ感激」と名詞化されているが、すでに述べた名詞化型とちがって、この名詞句は主語でも主題でもなく、理由・原因の格助詞といわれる「ニ」をとっている。

しかし、この文は、すでに述べた名詞化型、接続文型、独立文型のいずれにも言いかえが可能である。

(但し、「ノ」「コト」による名詞化には問題がある)

(40) a. ワタクシノ マコトニ 深イ 感激ハ 壇
上デ 涙ヲ オサエカネルホドデシタ
b. *ワタクシガ マコトニ 深ク 感激シタノ
ノコトハ 壇上デ 涙ヲ オサエカネルホド
デシタ
c. ワタクシハ マコトニ 深ク 感激シノシ
テ 壇上デ 涙ヲ オサエカネルホドデシタ
d. ワタクシハ マコトニ 深ク 感激シマシ
タ 井 壇上デ 涙ヲ オサエカネルホドデ
シタ。

こうしてみると(38)もそれほど特別のものではなく、結局、名詞化型のひとつとしてよさそうだ。「ニ」という理由の助詞は、前提の内容が、「ホド」がとる補文の内容の理由を示しているから、使うことができたので、すでに、(18)なども、2つの文が原因と結果を表わすものであることを指摘した。そこで、

(41) マコトニ 深イ 感激デ 壇上デ 涙ヲ オサ
エカネルホドデシタ

のように「デ」を使うこともできるが、この「デ」は、理由・原因の格助詞なのか、「ダ」の中止形なのか、むずかしいところだ。あるいは、そのいずれでもあるとしていいかも知れぬ。

要するに名詞化型は、「何ガドウデアルカ」という前提の内容を示すのが本来の機能なのであって、それに「ハ」がつくか、「ニ」がつくか、「デ」がつくかは、二義的な問題と考えるとよいのだろう。

2.4 第4の型——後方文脈型

以上「Sホドダ」が要求する前提を、3つの型に分類してみたが、いずれにしても「Sホドダ」に先行して「何ガドウデアルカ」を提示するという点では共通している。

ところが、このような先行する文脈——これを前方文脈と呼んでおく——のないものがある。

(42) 太郎ハ 死ヌホドデハナカッタガ トニカク
カナリ 疲レタ

(42)をパラフレーズすれば次のようになるだろう。

(42) 太郎ハ 死ヌホド疲レハシナカッタガ トニカク
カナリ疲レタ

つまり「死ヌホド」は(42)の下線の「疲レル」を修飾しているので、主文末尾の「疲レル」を修飾しているのではない。この方は「カナリ」が修飾しているの、「死ヌホド」とは直接の関係はない。しかしとにかく「疲レル」が2つ出ているので、主文末尾のを残し、先に出ている方を消去して「ダ」——否定辞があるから「デ」になるが——ととりかえたのが、(41)と考えられる。

このように前方文脈がなくても、後続する文脈——後方文脈と呼んでおく——によって、前提——後提？と呼ぶべきか——が間接的にでも示されれば、Sホドダ文が可能となる。これを第4の型——後方文脈型——とし、次のように形式化しておく。

(43) S₁ ホドダ Conj S₂

以上で4つの型をあげたが、要するに「Sホドダ」が示す非常の程度について、「何ガドウデアルカ」を直接または間接に示す前提が、前方または後方におかれて、文を完全なものとしているわけである。このような文脈が存在すれば、「Sホド」がとる述語は、繰返す必要がないから、それを消去し、代りに「ダ」において主文としての形をととのえるわけで、そうすると「ボクハウナギダ」と同じタイプのウナギ文の一種と考えてよさそうである。

3. NP ホドダ Neg

前章で述べたことは、同程度の「ホド」が使われる「NPホドダNeg」の場合にもあてはまる。

(44) ジャージーハ 縦ニ伸ビテモ 横ホドデハナイ

この文の基底文は次のようなものであろう。

(45) ジャージーハ 横ニ伸ビルホド 縦ニ(ハ)伸ビ
ナイ → ジャージーハ 横ホド 縦ニ(ハ)伸ビナイ

(44)と(45)とは事柄の意味を同じくする。(45)の否定辞は、主文の動詞「伸ビル」のあとについているが、「ジャージーハ縦ニ伸ビナイ」と言っているわけではない。「縦ニモ伸ビルガ、横ト同程度ニ伸ビルワケデハナイ。横ノ方ガモット伸ビル」という意味で、否定は直接には「横ホド」にかかわるとみるべきである。とすれば、(45)より(44)の方が、何を否定するかがはっきり示される。こんなことから Lakoff (1970) のように、副詞をむしろ述語と解釈する立場が出て来る。Jackendoff (1972) はそれを批判し、やはり副詞というカテゴリーを基底文に認めるわけであるが、この問題は小論では論じない。とにかく、

(46) 横ホドデハナイ

だけでは不十分だから、「何ガドウ横ホドデナイノカ」を示す前提が、「ジャージーハ縦ニ伸ビテモ」という逆接文の形で先行するのである。すでに前章でも述べたが、否定文の場合、前提は順接文ではだめで、逆接文でなければならない。非常の程度でも同程度でも同じことである。

(47) *ジャージーハ 縦ニ 伸ビ/伸ビテ 横ホドデ
ハナイ

そして逆接であれば、「テモ」でなくても「ガ」「ケレドモ」などでもいい。

(48) ジャージーハ 縦ニ(モ)伸ビルガ/ケレド 横
ホドデハナイ

以上は接続文型であったが、名詞化型はどうであろうか。

(49) a. ?ジャージーガ 縦ニ伸ビルノ/コトハ 横
ホドデハナイ

b. ジャージーノ 縦へノ伸ビハ 横ホドデハ
ナイ

(49)のaは私には不自然に感じられるが、一応、名詞化も可能としてよかろう。この場合逆接であることはもう示されなくなる。

次に独立文型も可能である。この場合は2つの文をただ並べるだけでなく、逆接の接続詞をとる方がよさそうである。

(50) ジャージーハ 縦ニ 伸ビル 井 (シカシ)横

ホドデハナイ

前方文脈が直接に表示されず、「何ガドウデアルカ」を暗示するだけの場合もある。

- (51) コレハ トクニ 大阪カラ 白馬ヲ 目ザス人ニ 利用価値ノ大キナ コースデ、シカモ、新コーストイウベキ トコロダケニ、人ノ数モ 四ツ谷口ホド デナク、気分ガ イイ

この文の意味は、人ノ数ハ四ツ谷口ホド多クナイであろうが、「人ノ数」という主語はあっても、「多イ」という述語は、前方にも後方にも現われていない。しかし「新コース」「人ノ数」「気分ガイイ」などが、前方または後方にあつて、それらが「四ツ谷口ノ人ノ数ガ多イホドコノ新コースノ人ノ数ハ多クナイ」という意味を理解させる。

次に、第4の後方文脈型も可能である。

- (52) ムロン ソノ前提トシテ、英米ホドデハナクテモ、或ル程度 割引市場ガ 発達シテオリ、売買ニ適スル証券ノ種類ガ 多く、会社ヤ個人ノ 証券所有モ多イ コトガ 必要ダ

長い文だから簡略化して、基底文と思われるものを次に示してみる。

- (53) 英米デ 割引市場ガ 発達シテイル ホド (日本デ) 割引市場ガ 発達シテイナクテモ、或ル程度 割引市場ガ 発達シテイルコトガ 必要ダ

前提となる情報は「割引市場ガ発達シテイル」であるが、前方文脈としては現われていない。後方文脈には「或ル程度」という別の程度副詞句があるから、前提を直接に提示する文ではない。しかし「割引市場ガ発達シテイル」という表現がここにあるので、これを前提として、(53)で下線を引いた同一成分を消去して、「英米ホドデハナクテモ」というホドダ文になったのである。

しかしもうひとつ、前提を間接的にでなく。直接的に後方文脈として提示することもできる。

- (54) ジャーギーハ 横ホドデハナイガノナクテモ 縦ニ(モ) 伸ビル

この文を(45)(44)と比べてみる。

- (55) a. ジャーギーハ 横(ニ 伸ビル)ホド 縦ニ(ハ) 伸ビナイ…(45)
b. ジャーギーハ 縦ニ伸ビテモ 横ホドデハ

ナイ……(44)

- c. ジャーギーハ 横ホドデハナイガ 縦ニ(モ) 伸ビル……(54)

a, b, cは同義であるが、aは基底文であり、b, cはホドダ文となり、bは前方文脈、cは後方文脈の型である。順接と逆接は、前後を入れかえても同義である場合があるが、bとcはその例であろう。もちろん焦点は、bとcとでちがっている。

以上を要するに、「NP ホドダ Neg」の型のホドダ文も、それが要求する前提は、「S ホドダ」と同じく、4つの型があるのである。

4. 比例の「ホド」

もうひとつ比例の「ホド」がある。しかし比例のホドダ文は資料には見当らなかった。そこで基底文aから、ホドダ文をつくってみる。

- (56) a. 争エバ 争ウホド 二人ノ孤独ハ 深マツタ
b. ?二人ノ孤独ガ 深マツタノ ハ 争エバ 争ウホドダツタ
c. ?二人ノ孤独ノ深マリ ハ 争エバ 争ウホドダツタ
d. *二人ノ孤独ガ 深マツテ 争エバ 争ウホドダツタ
e. 二人ノ孤独ハ深マツタ 且 争エバ 争ウホドダツタ
- (57) a. (斎藤緑雨デハナイガ、ペンハー本、箸ハ二本デアル) 純粋ナ文学者ニ ナレバ ナルホド 生活ハ 切実デアル
b. ?生活ガ 切実ナノ ハ 純粋ナ文学者ニ ナレバ ナルホドダ
c. ?生活ノ切実サハ 純粋ナ文学者ニ ナレバ ナルホドダ
d. *生活ガ 切実デ 純粋ナ文学者ニ ナレバ ナルホドダ
e. 生活ハ 切実デアル 且 純粋ナ文学者ニ ナレバナルホドダ

(56)(57)の例からみると、名詞化型と接続文型はどちらもおかしい。eのような独立文型になると、どうやらよさそうである。前提の提示のためには、独立文型が、最も自由であると言えそうだ。

参考文献

- 奥津敬一郎(1975)「程度の形式副詞」『都大論究』12号
" (1980)「ホド——程度の形式副詞」『日本

語教育』41号

Jackendoff, R. (1972) Semantic Interpretation in
Generative Grammar, MIT

Lakoff, G. (1970) Irregularity in Syntax, Holt

Muraki, M. (1974) Presupposition and Thematization,
Kaitakusha

(小論で使った資料については、国立国語研究所の
宮島達夫氏にお世話いただいた。厚く御礼申しあげ
る。

その他の資料および作例を含めて、すべて例文は
漢字カタカナまじり文に書きあらため、また便宜上
の変更もしたことをお断りしておく。

また例文の文法性の判断については、個人差のあ
るものもある。読者によって疑問の生ずるものもあ
るだろう。

小論は文部省特定研究言語による研究報告のひと
つである。)